クリトン［簡易版］

プラトン

大　庭　好　喜

目次

（ソクラテス）
「今日はやけに早いな」
（クリトン）
「たしかに、まだ夜明け前だからな」
（ソクラテス）
「それにしても、こんなに早い時間によくここに入れたな」
（クリトン）
「簡単だよ。牢屋（ろうや）の番人にこんな時のために、いつもお金や品物を渡しているからな」
（ソクラテス）
「ところで、眠っていたから分からなかったけれども今来たのかい、それともだいぶ前から来ていたのかい」
（クリトン）
「かなり前から来ていたよ」
（ソクラテス）
「それなら、なぜすぐ私を起こさなかったのかい」
（クリトン）
「いや、君が死刑判決を受けてから、なかなか眠れないのではないかと思ったからだよ。もし、やっと眠りにつけたところだったとしたら、起こすのは申し訳ないと思ったからさ。それにしても君は、いつものように熟睡（じゅくすい）しているように見えたけどそうなのか。眠れないということはないのか。私だったら、とてもそのように平静（へいせい）ではいられないと思うよ」
（ソクラテス）
「この年になって死期が近づいたからといってもがき苦しむのはばかげた話だよ」
（クリトン）
「しかし、君と同じぐらいの年の老人でも、死すべき運命に出会って、悩み苦しんでいる人を何人も見てきたよ」
（ソクラテス）
「それはいいとして、何の用事でこんなに朝早く来たのかい」
（クリトン）
「実は悲しい知らせをしなければならなくなったからだ。まあ君にとっては何でもないかもしれないけれど、われわれにとってはひじょうに悲しいものなのだ」
（ソクラテス）
「ひょっとして、死刑執行（しっこう）の期日が決まったのかい」
（クリトン）
「そうなんだ。どうも明日、君の死刑が行われることになるらしいのだ」
（ソクラテス）
「いや違うよ、クリトン。ぼくの死刑が行われるのは明日ではないと思うよ」
（クリトン）
「なぜそう思うんだい。なぜそんなことが分かるんだい」

（ソクラテス）
「実はさっきまでぼくは夢を見ていたんだ」
（クリトン）
「その夢でそのことが分かったのかい。それならぜひともその夢の話を聞かせてくれよ」
（ソクラテス）
「分かった。それは、今から３日後にソクラテスは幸せな場所に行くのだと、女性から告げられた夢だったんだよ」
（クリトン）
「不思議な夢だね」。
（ソクラテス）
「まあ、ぼくにはその夢の意味は、よく分かっているんだけどな」
（クリトン）
「死刑が行われるのが明日か３日後かはぼくには分からないけど、ソクラテス、今からぼくの言うことをどうかよく聞いてくれ。ともかくここから逃げ出してくれ。親友である君をぼくは失いたくないんだ。それとぼくがお金を惜（お）しんでソクラテスを逃がさなかったと、あとあと人々に非難（ひなん）されたくはないんだ。ぼくは君に何度も逃げてくれと頼んだが、ソクラテスは決して逃げようとはしなかったと言っても、誰も信じてくれるはずがないからな」
（ソクラテス）
「なぜそんなことを気にするんだい。賢い人はちゃんと真実を見ているよ」
（クリトン）
「多くの人々がどのように思っているかを絶えず考えておかなければならないことは、今回の君に対する死刑の投票で君にも分かったはずだよ。大衆を敵に回すとどんな小さなことでも大きな害となってふりかからないとも限らないからな」
（ソクラテス）
「ぼくは逆に大衆にそれだけの大きな力があればいいと思うよ。それなら人を幸福にすることもできるからだ。しかし、現実には大衆にはそのような大きな力はないのだよ」
（クリトン）
「その話はひとまず置くとして、ソクラテス、君はまさかぼくらが君を逃がしたことによって、財産を没収（ぼっしゅう）されたり、その他の罰を受けることを心配しているのではないのかい。われわれは、たとえそれ以上の犠牲（ぎせい）を払っても全くかまわない覚悟（かくご）はできているよ。どうかそんなことは心配しないで、ぼくの言うことを聞いて逃げてくれよ」
（ソクラテス）
「たしかに、君たちが罰を受けるかもしれないということは、ぼくの心配の一つであることは間違いないよ」
（クリトン）
「どうかそんな心配はしないでくれ。彼らが要求する金額などたかがしれているし、君のためなら仮にぼくの財産のすべてを使ってもかまわないよ。また、ソクラテスのために使ってくれと言ってわざわざお金を持ってやってくる人もいるくらいだ。だから何も気

にすることなく逃げてくれ。君ならどこへ行っても歓迎されるはずだよ。生きのびようと思えばいくらでも生きながらえる方法はあるのに、なぜ、自ら死を選ぶのか、ぼくには理解できないし、そのことに賛成もできないんだ。奴（やつ）らのわなにまんまとはまるのかい。残された息子たちはどうなるのかい。息子たちを見捨てるのか。君には子供たちを養なう義務があるのではないかい。
そもそもこの裁判から死刑の判決までを防げなかったのはわれわれの力のなさだし、もし君を今ここから助け出せなかったら、われわれはさらにひきょうな人間だと世間から思われることになる。ソクラテス、ここを出ることが君を含めすべての人にとっていいことなんだ。考えている暇はない。今晩中にここを出なければならないのだ。ぐずぐずしていたらすべてが無駄（むだ）になってしまうのだ」
（ソクラテス）
「クリトン、君の熱心さには感謝するよ。しかし、私は今まで心の底から正しいと思うことだけしか行ってこなかった。これから先も今以上のどんな脅（おど）かしにあおうとも私はこのことだけは守っていく。
間違っているかもしれない大衆の意見が尊重され、正しくても少数の意見なら尊重されないというようなことは正しいことではないよな」
（クリトン）
「たしかに、正しいことではない」
（ソクラテス）
「われわれは、正しい知恵をもっている人の意見に従うべきで、正しい考えをもたない人の意見には従うべきではないな」
（クリトン）
「そのとおりだ」
（ソクラテス）
「運動選手は、多くの大衆の意見を聞くだろうか、それとも一部の専門家の意見を聞くだろうか」
（クリトン）
「もちろん、専門家だ」
（ソクラテス）
「つまり人間が大事にすべきなのは、大衆の意見ではなく、ただ一人の専門家の正しい意見だな」
（クリトン）
「そのとおりだ」
（ソクラテス）
「ところがある運動選手が逆に大衆の意見を尊重したら、それは災（わざわ）いをもたらすよな」
（クリトン）
「そのとおりだ」
（ソクラテス）
「では、その災いとはどんなものなのか」

（クリトン）
「身体に対してもたらされる悪いことだ」
（ソクラテス）
「このことは、運動選手以外のどんな人にもあてはまるのではないのかい」
（クリトン）
「そのように思える」
（ソクラテス）
「運動選手が専門家の意見を聞かなかったために悪い影響を受けるとしたら、それは身体かい」
（クリトン）
「そのとおりうだ」
（ソクラテス）
「それなら不健康な身体で生きがいなどあるかい」
（クリトン）
「ないと思う」
（ソクラテス）
「そこで、知恵のある人間なら、生きるということはどれだけ長く生きたかではなく、どれだけ生きがいのある人生が送れたかが大事だと言うのではないか。つまり、単に生きるのではなく、より善く生きることが重要であると言うのではないか」
（クリトン）
「そのとおりだ」
（ソクラテス）
「そして善く生きるということは、正しく生きることだよな」
（クリトン）
「そのとおりだ」
（ソクラテス）
「それじゃあ今までの議論の結論から次のことを考えてみよう。ぼくがアテネの人々が同意しないのに、ここから逃げだすことは正しいことだろうか。もし正しいことなら私はそれを行う。私が逃げた場合、君らが受ける非難や君らにお金を出させること、また私の子供たちの将来のことなども気にかからないわけではないが、それらは私にとっては大きな問題ではない。私にとって大事なことは、果たして私がここを逃げ出すことが正しいことなのかどうかということだ。ここにいると殺されることになるが、それは不正を犯すことに比べればまだましなことだと思う」
（クリトン）
「君の言うことはたしかに正しい。それなら、私はどのようにすればいいのか教えてくれ」
（ソクラテス）
「まず、ぼくに反論できることがあればどうぞしてくれ。その反論にぼくが納得できたならばそれに従うよ。そうでなければ、もう逃げろなどということは言わないでくれ。ぼくは、できることなら君の同意を得たうえで行動したいんだ。クリトン、ぼくらはいかなる時でも不正を行ってはならないと結論したよな」

（クリトン）
「そのとおりだ」
（ソクラテス）
「不正を受けたから、不正でもって仕返しをすることは許されないことだよな」
（クリトン）
「そのとおりだ」
（ソクラテス）
「さらに聞くよ。人間は他人に災いをもたらしてもよいのか」
（クリトン）
「いや悪い」
（ソクラテス）
「他人から害悪を受けたら、同じような害悪を加えることで仕返しをするということは正しいことか」
（クリトン）
「いや、正しくない」
（ソクラテス）
「人に害を加えることということは、不正を行うということだよな」
（クリトン）
「そのとおりだ」
（ソクラテス）
「たとえ自分がどんな災難を人から受けさせられようと、この原則は変わらないし今も変わっていないのだ」
（クリトン）
「ぼくも変わってはいない」
（ソクラテス）
「また、人間は他人に対して約束したことは、守るべきか守らなくてもよいか」
（クリトン）
「当然、守るべきだ」
（ソクラテス）
「それなら私が国家の許しを得ることもなくここから逃げ出すことは、誰にも迷惑をかけないことでまた正しいことだと言えるのか」
（クリトン）
「その答えは、ぼくには分からないから、答えることはできない」
（ソクラテス）
「国家や国の法律が生きている存在だとしよう。もし、私がここから逃げようとしたら、彼らは私の所にやってきて、『お前は今、国家と国の法律を破壊しようとしているのではないか』と、また『国家の中で暮らす人々が自分勝手に国の法律を破るとしたら、そのような国家は存在し続けることができるのか』と言うであろう。それとも彼らがそのようなことを言うことが間違っているとでもいうのかい」
（クリトン）

「私は国家が間違ったことをしたのだと思う。国家が君に対して正しくない判決を下したのだ」
（ソクラテス）
「それなら国の法律はこのように言うだろう。『お前は国家の法律に従うと誓ったのではないか。いったいお前は国家や国の法律の何に対して文句を言っているのだ。まず第一に、お前が生まれ、今までこのように生きてこられたのは国家のおかげではないのか。国家があったからこそお前の父と母は出会い、安心してお前を育てることができたのではないか。わが国の結婚に関する法律で、お前に非難できるものがあるのか。子供の教育に関するもので、何か不満なものでもあるのか。お前は、どれだけの恩を国家や国の法律から受けてきたと思うのか。
お前は、父親や母親と同じ権利を持っているとでも言うのか。国家や国の法律に対してもお前の権利はそれと変わりないはずではないか。いや、国家とは父や母よりももっと偉大（いだい）で、尊（とうと）ぶべきものではないのか。国家とはそういうものであるはずだ。いついかなる時でも、国民は国家の命令に従わなければならないのだ。まさか、お前は父母に暴力を用いることなどないであろう。ましてや、国家や国の法律に対して、力でそれに反対する行為など許されるはずがない。そんなこともソクラテスは分からないのか』と、このように言ってきたら君はそれでも国家の言うことは間違っているとでもいうのかい」
（クリトン）
「国家のいうとおりだと思う」
（ソクラテス）
「国や国の法律はさらに続けて言うだろう。『今、おまえがここから逃げるということは間違った行いである。私は、お前を育て教育などのあらゆる良いものを与えてきたはずだ。また、お前が望むならいつでもお前は全財産をかかえてこの国を去ってもよいとまで言ってきたのではないか。それにもかかわらず、お前はここに住み続けている。それならお前には、国家に服従する義務があるのではないか。もし、国家が間違っているというなら、私を説得して改めさせるべきではなかったか。国は、それをお前に許してきたはずだ。もし、お前がここを逃げるというなら、その行動に対する非難はすべてお前に向けられるのだ。すべてお前の責任である。なぜなら、国家とこのような約束をしたのは、ソクラテスお前自身だからだ。お前はこの国が気に入っていたはずだ。第一お前は、この国を用事もなく離れたことがない。おまえがここに住み、ここで子供をもうけたことも、ここが気に入っていたからではないのか。さらに、お前は裁判の途中で国外追放の刑罰を受け入れることもできたはずだ。ところがお前はどんな刑にも従うと言って、それを選ばなかったではないか。自ら死刑を選んだようなものではないか。それなのに今になって、私にそむいて逃げようとしている。恥をさらすことだとは思わないのか』このように国や国の法律が言ってきたらクリトン、お前はどのように答えるのか」
（クリトン）
「たしかに国や国の法律の言うとおりだと思う。反論できない」
（ソクラテス）
「さらに国家は私に言うだろう。『お前はわれわれとの契約を無視しようとしているので

はないか。お前が私のもとを立ち去ろうと思えば、いつでもできたはずだ。７０年間もの余裕があったではないか。お前はこの国とこの国の法律が好きなのだ。まさか死からのがれたいだけの理由でこの国から逃げて人の物笑いの種となるようなことはないよな。お前が逃げたり、この決定に従わなければ、どのような結果がお前たちにふりかかってくるのか分かっているのか。お前はもちろんのこと、お前の家族や友人もすべて国家追放の刑を受けたり、財産をすべて取りあげられたりするのだぞ。
また、お前が他の国に逃げても、そこでお前はその国の法律の敵と呼ばれる人間になるのだ。お前はそこでは、国の法律の破壊者と呼ばれるはずだ。そうなれば、お前に対するこの判決は、間違いではなくやはり正しかったものだと人々から思われるだろう。そんな状況でそこの場所でお前は正義を人々に語ることができるとでも言うのか。まあ、秩序のないような国では、逃げのびてきた者として暖かく迎えられるかも知れないがな。それもまた笑える話だ。どうしてあと少しの寿命（じゅみょう）しかないであろうお前が恥をかいてまで生き続けようとするのか。
お前は逃げのびた場所で、奴隷のように他人に気に入られるように人の機嫌（きげん）をとって生きていくのか。お前はわが子を立派な人間に育てあげたいのではないのか。しかし、そのような状態のお前に子どもが一緒についていけるとでも思うのか。たとえお前がいなくても子供たちはお前の友人が育てていくであろう。だからソクラテス、正義を貫くこと以外には何も考えるな。お前がこのままこの世を去るなら、一般大衆から不正を受けた人間として認められるであろうが、もし逃げたなら国家や国の法律に間違った仕返しをした人間としてどこへ行っても、また死んだ先でも恥をさらし続けるであろう。お前は私の考えに従うのが一番いいのだ』クリトンよ。私にはこういう声がたえず聞こえるのだ。それでも君はまだ私に何か言おうとするのかい」
（クリトン）
「いや、もう何も言うことはないよ」
（ソクラテス）
「じゃあ、ぼくは自分の考えるとおりに行動するよ」

クリトン［簡易版］

翻　訳　　大庭好喜

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社